

「十歳のきみへ」

3年 I.M

みなさんは「十歳のきみへ」という本を知っていますか。この本は私の祖父が、私が十歳の時にくれた本です。私はこの本を今回、もう一度読んでみようと思いました。それはこの本が好きなものもありますが、この本の作者の日野原さんが今年の夏、105歳でお亡くなりになったことがきっかけで、もう一度読んでみようと思いました。

この本の作者は日野原重明さんといいます。この方は聖路加国際病院の名誉院長で、生涯、現役の医者でした。また、新聞でコラムの連載もしていました。

私はこの本について書く前に日野原さんのことを少し調べてみることにしました。日野原さんは1941年から2017年の76年間医者であり続けました。その中で何冊もの本を出版したり、各地で講演会を開いたり、東京大空襲や地下鉄サリン事件で患者を救護しました。日野原さんはいつも患者さんのことを考えていて少しの時間も無駄にしていなかったそうです。また、自分が楽しむことで周りも楽しむことができると考えていたのでもいつもニコニコしていたそうです。このようなことが認められ、2005年には文化勲章を受章しています。

少し日野原さんのことが分かったところでこの本のことについて書いていきたいと思っています。

この本では寿命とは何か、時間とは何か、十歳の頃の日野原さんのことや家族についてや、私達に日野原さんが託したいことなど様々な方向から話しています。私は今回読んでみて印象に残った言葉をあげたいと思います。

一つ目は「時間にいのちをふきこめば、その時間が生きてきます。」という言葉です。この言葉を聞いてみなさんはどんな意見が分かりましたか。私はよく分かりませんでした。ですが、次にこのように話しています。「時間というのは、ただのいれものにすぎません。そこにきみがなにをつめこむかで、時間の中身、つまり時間の質が決まります。いきいきと過ごせば、その時間はまるできみのいのちをふきこまれたようにいきてくるのです。」どんなに時間があつたとしても、その時間の質が大切なのだと、それは一日一日の積み重ねを大切にしなければいけないのだと思いました。日野原さんも言っていましたが、日本人が寿命が長いからといって寿命が短い人たちよりも幸せとは限らないとのことでした。時間の質が大切だと思うとその通りだと思うし、時間の使い方は大切なことだと思いました。

二つ目は「ほかの人のためにきみはどれだけの時間をつかっていますか。」という問いかけです。私はこの時考えてみました。平日の一日を考えてみると三十分も人のために時間を使っていないと思いました。人のために何かをするということは誰かにプレゼントをもらった時の嬉しさとはまた別の嬉しさがあります。人に何かを分けてあげたり、してあげたり、少ない時間でもいいからたくさんの人に何かをしてあげられる人になりたいです。それは意識しなければできないことだと思っています。周りを良くできることをしていきたいです。

三つめは「『知る』ということをもっと大事にしてください。」という言葉です。戦争を経験した日野原さんだからこそ、より思うことで、相手のことを考えたり察したりすることでお互いの仲が良くなるのだと思います。例えば、喧嘩をした時に相手の立ち場を考えると意識をしてみるだけで変わるのだと思います。私にとってはまだ難しいことだけれど意識していきたいです。

最後に、この本を読んで寿命や時間というものの新しい見方だったり、家族の存在だったり、共感できる部分も新しい発見だったり自分に得る部分の多い本だったと思います。